

羽衣

世阿弥作

ワキ 漁夫白龍

ツレワキ 同行漁夫

シテ 天人

地は 駿河

季は 春

ワキ、ツレ一声

「風早の。三穂の浦回をこぐ舟の。浦人さわぐ浪路かな。」

ワキサシ

「是は三保の松原に。白龍と申す漁夫にて候。」

ワキツレ

「万里の好山に雲忽におこり。一楼の明月に雨はじめて晴れり。げにのどかなる時しもや。春のけしき松原の。浪立ちつゝく朝霞。月ものこりの天の原。及なき身のながめにも。心そらなるけしきかな。」

下歌

「わすれめや。山路をわけて清見がた。はるかに三保の松原に。たちつれいざやかよはん。」

上歌

「風向ふ。雲の浮浪たつと見て。く。釣せで人やかへるらん。待てしばし春ならば。吹くものどけき朝風の。松は常盤の声ぞかし。浪は音なき朝なぎに。釣人おほき小舟かな。く。」

ワキ詞

「われ三保の松原にあがり。浦のけしきをながむる所に。虚空に花ふり音楽きこえ。霊香四方に薫ず。」

是たゞことゝ思はぬ所に。これなる松にうつくし
き衣かゝれり。よりてみれば色香たへにして常の
衣にあらず。いかさま取りてかへり古き人にも見
せ。家の宝となさばやと存じ候。

シテ詞

「なふその衣はこなたのにて候。何しにめされ候ふ
ぞ。

ワキ

「是はひろひたる衣にて候ふ程に取りて帰り候ふ
よ。

シテ

「それは天人の羽衣とて。たやすく人間にあたふべ
き物にあらず。本のごとくに置き給へ。

ワキ

「そも此衣の御ぬしとは。さては天人にてまします
かや。さもあらば末世の奇特にとゞめおき。国の
宝となすべきなり。衣をかへす事あるまじ。

シテ

「かなしやな羽衣なくては飛行の道も絶え。天上に
かへらんことも叶ふまじ。さりとは返したび給
へ。

ワキ 「此御詞を聞くよりも。いよく白龍力を得。本より此身は心なき。天の羽衣とりかくし。かなふまじとて立ちのけば。

シテ 「今はさながら天人も。羽根なき鳥の如くにて。あがらんとすれば衣なし。

ワキ 「地にまた住めば下界なり。

シテ 「とやあらんかくやあらんと悲しめど。

ワキ 「白龍衣をかへさねば。

シテ 「力及ばず。

ワキ 「せんかたも。

地 「涙の露の玉鬢。かざしの花もしをくと。天人の五衰も。目のまへに見えてあさましや。

シテ 「天の原ふりさけみれば霞たつ。雲路まどひてゆくへ知らずも。

下歌地 「住み馴れし空にいつしかゆく雲の。羨ましきけしきかな。

上歌

「迦陵頻迦のなれくし。く。声今さらにわづかなる。雁金のかへりゆく。天路を聞けばなつかしや。千鳥鷗の沖つ浪。ゆくか帰るか春風の。空に吹くまでなつかしや。く。」

ワキ詞

「いかに申し候。御姿を見たてまつれば。あまりに御痛はしく候ふ程に。衣をかへし申さうずるにて候。」

シテ

「あらうれしやこなたへ給はり候へ。」

ワキ

「しばらく。うけたまはり及びたる天人の舞樂。たゞ今こゝにて奏し給はゞ。衣をかへし申すべし。」

シテ

「うれしやさては天上にかへらん事をえたり。此よろこびにとてもさらば。人間の御遊のかたみの舞。月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今こゝにて奏しつゝ。世のうき人に伝ふべしさりながら。衣なくては叶ふまじ。さりとしては先かへし給へ。」

ワキ

「いや此衣をかへしなば。舞曲をなさで其まゝに。」

天にやあがり給ふべき。

シテ「いや疑ひは人間にあり。天に偽りなき物を。

ワキ「あら恥かしやさらばとて。羽衣を返しあたふれば。

シテ「少女は衣を着しつゝ。霓裳羽衣の曲をなし。

ワキ「天の羽衣風に和し。

シテ「雨に湿ふ花の袖。

ワキ「一曲をかなで。

シテ「舞ふとかや。

地次第「東遊の駿河舞。く。此時や始めなるらん。

クリ「それ久堅の天といつぱ。二神出世のいにしへ。十方世界をさだめしに。空はかぎりもなければとて。久方のそらとは名づけたり。

シテサシ「しかるに月宮殿のありさま。玉斧の修理とこしなへにして。

地「白衣黒衣の天人の。数を三五にわかつて。一月夜々

の天乙女。奉仕をさだめ役をなす。

シテ「我も数ある天乙女。」

地「月の桂の身を分けて。仮に東の駿河舞。世に伝へたる曲とかや。」

クセ「春霞。たなびきにけり久かたの。月の桂も花やさく。げに花かつら。色めくは春のしるしかや。おもしろや天ならで。こゝも妙なり天津風。雲の通路吹きとぢよ。乙女の姿しばし留まりて。此松原

の。春のいろを三保が崎。月清見潟富士の雪。いづれや春のあけぼの。たぐひ浪も松風も。のどかなる浦のありさま。そのうへ天地は。何を隔てん玉垣の。内外の神の御末にて。月も曇らぬ日の本や。

シテ「君が代は。天の羽衣まれに来て。」

地「撫づとも尽きぬ巖ぞと。聞くも妙なり東歌。声そへてかずくの。笙笛琴箏篳。孤雲の外に満

ちくく。て。落日の紅は。蘇命路の山をうつして。

緑は浪に浮島が。払ふ嵐に花ふりて。げに雪をめぐらす。白雲の袖ぞ妙なる。

シテ
「南無帰命月天子。本地大勢至。

地
「東遊の舞の曲。（序の舞）

シテワカ
「あるひは。天つ御空の緑の衣。

地
「又は春立つ霞の衣。

シテ
「色香も妙なり乙女の裳。

地
「左右左右颯々の。花をかざしの天の羽袖。なび

くもかへすも舞の袖。（破の舞）

地
「東あそびのかずくに。く。その名も月の色人

は。三五夜中の空に又。満願真如の影となり。御

願円満国土成就。七宝充滿の宝を降らし。国土に

是をほどこし給ふ。さるほどに時うつて。天の

羽衣浦風に。たなびきたなびく三保の松原。浮島

が雲の。足高山や富士の高嶺。かすかになりて天

つみそらの。霞にまぎれて失せにけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第一輯』大和田建樹 著